

## 第二三回光華講座

# 仏教の原点とは何か

―釈尊の「真宗」―

大谷大学学長

小川 一 乗

はじめに

ただいまご紹介いただきました小川でございます。今日は「仏教の原点とは何か―釈尊の「真宗」―」というお話をしていただきます。実は「釈尊の「真宗」という言い方をしたのは、ここ数年間、大谷大学で「仏教学概論」を講義していき、前期は「釈尊の「真宗」と題し、後期は「親鸞の「真宗」と題して、その講義内容をシラバスで示して講義をしているものですから、それを今日の講演のサブタイトルとさせていただきます。

## 死を考えることの意味

仏教の原点は何か。難しいことのように思われますけれども、その原点を問う前に、次のことを確認しておかなければなりません。それは仏教に限らず、キリスト教でも宗教と言われるものは全て、死の問題を抜きにしてはありえないということです。私たちは必ず死ななければならぬ、死すべき身をいかに生きるか。必ず死んでいかなければならない、ただ今の命を精一杯生きるにはどうしたらいいのか。この問いがあるからこそ、宗教というものが必要とされているのであろうと思います。そうであれば、仏教は死をどう考えているのであろうか。このことなのですが、どうも戦後の日本は死を考えない国になっているのではないのでしょうか。経済的な発展のみを追求する経済至上主義の中で、この世において物質的に豊かな快適な生活を送ることのみに腐心し、死などを考えると暗くなってしまう。死のことを考えないでこの世をいかに快適に安樂に生きられるか。そのことだけを追い求めているために、宗教とか仏教というものも死を抜きにして、この世をいかに都合よく生きるかという「生き方を教えます」と、そういうことを平気で言う宗教家が現れている。人生を快適に楽しく生きる方法を教えるのが宗教であると変なことになっていまして、そういう意味では、死という問題に触れると暗くなるといわれるため、最近の日本仏教の大方は死の問題を避けていると思います。

そういう現状を見ます時に、この世で衣食住に満ち足りた、その意味では理想の天国をつくってしまつて、これ以上の世界は望めませんから、死ぬのはいやだと言つて死から逃げ回っている。それが現状ではないでしょうか。浄土真宗という場合、浄土を説く真宗ですから、死の問題を抜

きにして真宗は語れないはず。ところが死を避けて、死のことに触れないで真宗を語っている。基本的に一番大事な問題が欠落している。「浄土に往生する」という問題につきましても死ということと無関係に、この世に浄土を作ると言って、社会改革を目指す運動による理想の世界が浄土であるとか、争いや差別のない平和な理想の世界が浄土であるなどと言われたいしますが、それは少しおかしいのではないかと、最近はずき始めているようです。私が大学に入った頃、昭和三〇年代は大学の先生でも「浄土とは理想の世界である」ということを言っている真宗学者もいたわけです。「浄土は理想のパラダイスだ。争いのない、皆んなが仲良く差別なく生きていく世界が浄土である。ヒューマニズムの世界が浄土である」という言い方が罷り通った時代がありました。どうしてそうなったのか。それは死をタブー視し、生のみを求めたからです。

いつも冗談で言うんですが、私の寺は北海道にあります。遠いですから、国内線として飛行機が飛び始めた当初からいつも利用していますので、もう二〇〇回以上は乗っていることになりす。なかなか落ちません。そろそろ落ちるご縁を頂くかなと。それはともかくとして、飛行機は現代の科学技術を最大限活用したハイテクで飛んでいるわけです。ところが、全日空に乗りますと四番の席がないんです。なんという愚かなことなんだろうと思うんです。日本航空には四番があるので、ここは進んでいるなと思うと二三番がないんです。人間というのは愚かです。なぜ四番がないのか。関係者の方に聞いておりませんが、多分、死(四)をタブーにしている。国際線で二三番がないのはよくわかります。キリスト教における一三日の金曜日ということ。全

日空には四がないということを一〇年くらい前から言ってるんですが、未だに四番の席がないのです。全日空の関係の方がおられましたら、愚かなことを早くやめるように言ってください。

死というものを覆い隠して見ないようにしている。死のことを考えたら人生が暗くなる。そういう考え方に浄土真宗も迎合しているのでしょうか、死ということを口にしなくなった。そのうちに五〇数年たったら、その後に生まれた子どもたちが、特に寺に生まれた子どもでも、死について聞いたことがないものだから、死んだらどうなるかわからない。大分前ですが、浄土真宗の若い住職方の研修会で「皆さん方は、門徒の方から死んだらどうなるかと尋ねられたら何と答えますか」と尋ねました。これから住職になろうとする人たちの研修会ですが、皆んな下を向いて答えないんです。日本人は面白い、質問を受けると必ず下を向いて耐え忍ぶ。去年、ハワイ大学で「仏教における死の問題」という講義をしました。これからホスピスの資格を取ろうとしている学生を対象とした講義でした。向こうの学生諸君はすごいです。一時間あまり講義をして「何か質問は？」と言うと、ほとんどの人が手を挙げます。すごいなとうれしくなって、当てましたら、あまりいい質問をしないんです。中身がそれほどでもないんです。元氣よく質問することはいいことだとはいえませんが。日本では「何か質問は？」と言うと下を向いてしまう。日本人はいい質問をしようと一生懸命に考えているうちに、時間が終わってしまう。それもそれでいいのではないかと思います。よく言われているように何でも自分を主張して、中身はどうであれ、ハイハイと手を挙げて自己主張をする。動物的人間、攻撃的です。日本人は一生懸命になって、何かいいことを言おうと考えてうつむいているうちに時間がなくなる。これは植物的人間という

らしいですが、こっちの方が文化が高いのじゃないかなとハワイで感じました。

それはともかくとして、研修会で誰も答えないんです。それで「これからご住職になろうとするあなた方が、門徒の方から命を終えたらどうなりますかと聞かれて答えられないようなことでよく住職になりますね」と言いましたら、さすがに前の方に座っていた若い人が真っ赤な顔をして立ち上がって「先生、明日のこともわからないのに、死んだ後のことなどわかりません」と答えました。明日のこともわからない、これは諸行無常です。これはわかりません。私も明日まで生きているかどうかわからない。これはいいです。だから死んでからのことはわからない。これはちよつと乱暴だと思います。『教行信証』に「常楽」の世界とあります。常住で安楽な世界であつて、無常な世界ではない。これを無常の娑婆であるこの世と一緒にしてもらつては困ります。その時、一番後ろに座っていたお年寄りの指導されていた方が、たまりかねたのでしょうか、「あなた方は、そんなこともわからないのですか。死んだら極楽に行くに決まっているじゃないですか」と語気を強くして叱声しました。どうですか。この叱声は正しいんです。正しいんだけれども、皆さん方は、ちよつと首をかしげるのではないのでしょうか。「死んだら極楽に行くに決まっているじゃないですか」と言われても、極楽が見えなくなっているのが現代です。現代は極楽とは何かということがはっきりしなくなつた。死の問題を五〇年間も尋ねてこなかったから見えなくなつてしまつた。歳をとられた住職の答えは間違っていない。間違いでないことをこれから少し申し上げたいと思います。

なぜ死後のことを私たちは問わなくなつたか。二〇世紀後半から始まりました科学的合理主義、

科学的というのは自分が体験できて実証できる知識のことを科学と言います。「広辞苑」を引きますと「経験的に実証可能な知識」を「科学」というのです。そういう知識によって「これは確実である、不確実である。これはいいもの、これは悪いもの、これは都合のいいもの、これは都合の悪いもの」と合理的に物事を選別していく。これが科学的合理主義です。そうすると死はどうですか。経験的に実証できますか。実証した途端に終わりです。誰も経験的に実証できない。だからわからない。経験的に実証できる知識のことを科学と言うわけですから、死は科学では実証できない。科学で実証できないものはわからない。これが現代人の常識です。これから住職になろうとする人が「死んでからのことはわからない」というのは彼の責任ではない。現代の科学主義の責任なのです。大体、学者はこういう答え方をする。科学的でなければいけませんから、どんな偉大な仏教学者でも「死のことはわからない。死後のことは死んでみないとわからない」としか答えられない。そういう科学を絶対視する迷信が現代社会を覆っている。若い人がわからないというのは時代の責任です。いうまでもなく、科学的にわかるといふことが知識ではありません。科学的にわかるといふのは、「知」の範囲です。しかし、人間は「知」だけで生きていくわけではありません。「情」もあれば「意」もあるわけです。したがって、「知・情・意」というトータルなところで「わかる」といふ知識がなければなりません。それを科学的にわかることだけが知識であるというのは、科学主義に陥っている一つの現代の迷信であると思います。

## インドにおける死の捉えかた

しかし仏教では死の問題はきちつと解決されています。そのことを私たちは再確認しないといけない。それが今日の仏教の原点の大事な一つです。仏教はどういう教えなのか。皆さん方にはすでにわかっておられるかと思いますが、そのことを説明したいと思います。そうすると必然的に仏教における死の問題は解決されていくからです。

釈尊によって仏教は始まりましたが、釈尊という方は今から二五〇〇年ほど前、はっきり生没年代が確定しているわけではありませんが、紀元前四六三年に生まれ、紀元前三八三年に亡くなられ、八〇歳の生涯を終えられたとなっているのが、生没年代です。今から二五〇〇年くらい前です。その当時のインドはどういう状態であったのか。すぐれた宗教思想が定着した時代です。「業報による輪廻転生」という生命観です。自らの行いの報いを受けて生まれ変わり、死に変わりを永遠に繰り返していくという生命観です。このような生命観によって独特の宗教倫理ができ上がっていたわけです。これより先のインドのヴェーダ時代は、死後はおおらかで、安楽なところという楽天的な死後観があったのですが、その後、業報による輪廻転生という生命観ができ上がって、業というのは行為という意味で、行いの報いを受けて、生まれ変わり、死に変わりを永遠に繰り返すのが私たちの命であるという生命観ができあがった。これは非常にすぐれた倫理観でもあると思います。

人々に善を行わしめ、悪を行わしめないという倫理観です。よくもこのようなことを考え出したものだと感じします。二五〇〇年前に遡らなくても、国家によって制定された法律があつて、

その法律によって裁かれるという時代は近代になってからですから、それ以前は権力者の意向によって人の命は奪われ殺されていたわけです。一国の王が「この者の首をはねよ」と言えば、その人の首ははねられるわけです。そういう時代に、こういう考え方をくりあげたことはすごいことだと思います。権力者もあまり好き勝手できない。次の世が恐ろしくなる。自らの行いの報いを受けて生まれ変わるわけです。そのために善政を行ったインドの古代の国王は結構多いのです。来世にもっと安楽ないい生まれに変わりたいという願望がある。そういう意味では業報による輪廻転生という生命観はすぐれた倫理観でもあったわけです。今でもインド人のほとんどはこの生命観を信じているのではないかと思います。大谷大学にはインドから来ている留学生も、チベット人で日本人になられた方もいますが、そういう人たちは輪廻転生を信じています。かつてデリー大学の学生諸君に「あなた方は輪廻転生は信じていますか」と聞いたことがあります。『信じています』と答えていました。今のインド人も信じているわけです。西洋文明の汚染を受けたインテリ以外は信じているのではないのでしょうか。そういう考え方ができあがった時代です。

生まれ変わり、死に変わりを、永遠に繰り返し続けていかなければならないという苦しい輪廻の世界からどのように解放されていくか。その道をいろんな方が説きはじめた時代。そういう時代に釈尊はいたのです。当時のインドの宗教家たちは輪廻の世界からどのように解放されるか。それを「解脱・ヴィモークシャ」といいます。親鸞聖人の『浄土和讃』の中に「解脱の光輪」とありますが、解脱とは輪廻の世界から解放されるということを言うわけです。その解脱をその当



時の人々は一生懸命に模索したわけです。そうすると「東の方にすばらしい宗教家が現れて輪廻の世界から解脱する教えを説いている」と聞くと、家を出て、何十日も歩いて、そこへ行って話を聞き、静かに林の中で瞑想する。今度は「南の方にすばらしい宗教家が現れた」と聞くと、何十日も歩いて旅をして、説法を聞き、聞いた説法を静かに考える。そういう人たちが現れた。そういう人を「沙門・シユラマナ」と言います。それは「努力する人」という意味ですが、そういう人たちがどんどん現れてくる。釈尊もその沙門となって出家することになるわけです。

## 釈尊の死の捉え方

### ― 釈尊の出生地について ―

ところで、そのような輪廻の世界に転生するという生命観が確立され、その輪廻からの解放を模索したのが、その当時の宗教家であったわけですが、釈尊だけは彼らと違った視点を持ったわけです。そのことが、やがて仏教が世界宗教となっていく基本となったと言えます。そのことについて、彼の出家の動機を手がかりとして説明しますと、釈尊の生涯を文学として綴った伝文学があります。釈尊が亡くなってから二五〇年くらい経ってから編纂されたのではないかと推定されていますが、かなり後代になって、大乘仏教運動が始まる直前くらいに作られたのではないかと思います。その仏伝文学の中で、釈尊が出家をする動機が「四門出遊の物語」として語られています。釈迦族の城はカピラ城と言いますが、そこには東南西北の四つの門があり、そこから出て遊ぶという「四門出遊」の物語によって、出家の動機が語られています。釈迦族の城であつ

たカピラ城がネパールの方で発掘されていて、ほぼ間違いないとされています。また、カピラ城に隣接したインド領でカピラ城に隣接していた僧院の跡も発掘されていますから、今のネパールとインドの国境にまたがって釈迦族がいたわけです。カピラ城の近くにある僧院の仏塔（ストゥーパ）の中から発見された舍利器の中に釈尊の骨が入っていたのです。しかも器にはカピラと読める字が書いてあった。多分、釈尊の本物の骨だろうと思いますが、それがデリー博物館に特別に展示されています。皆さん方もインドに仏教遺跡などの巡礼で行かれた方は、デリー博物館に釈尊の骨と舍利器が展示されているのを見られたと思います。以前に行った時、「この遺骨のDNA鑑定をしないのか」と聞いたんです。「釈尊のお骨に決まっているから鑑定はしない」と言われました。私も釈尊の遺骨であると信じていますが、DNA鑑定をして欲しいのです。どうしてかと言いますと、釈尊の本当の顔は、日本の寺や博物館で見られる釈尊像とか阿弥陀如来像などの顔のような顔ではないと確信しているからです。あの顔は今のパキスタン地方の顔です。ガンダーラ仏教美術の生まれたところ、ガンダーラ地方の人たちの顔です。今でも釈尊のモデルになれるような人たちが一杯います。あそこからカイバル峠を通じてシルクロードとドッキングして世界に広がったガンダーラ仏教美術によって作られた仏像が皆さん方が日頃親しんでいる仏・釈尊の顔なのです。ですから、中国、朝鮮、日本にある仏像のルーツは全部ガンダーラ仏像なのです。そのガンダーラ地方は、種族的にも地域的にも釈迦族とは全く関係がありません。そうすると釈迦族の城跡と、その僧院が発見されて、カピラという城の名前までが確認されているわけです。これまでは、本当に釈迦族の居城であるカピラ城があったのだろうかとか、城に四

つの門があったというのは本当であろうかとか、ということが確認されて、証明されたわけです。文学の上ではそう語られているけれども、本当にそうだったのかという二つの疑問が解けて、大體において証明されたわけです。城跡が発掘されて、レンガが敷き詰められていて、昔の轍の跡が深く食い込んだ西門と東門が確定されました。北門と南門がまだ確定されていませんが。城の名前がカピラであることも舍利器に書かれている文字から証明されました。そうすると、あのへんに釈迦族があったとなると、あのへんに行きますと、現在はインド的な顔をした人とネパールの顔をした人とが混在して住んでいます。もし釈迦族がネパール系の人種であれば、多分、釈尊は私たちに近い顔をしていたのではないかと考えられます。絶対にガンダーラ仏教美術によって作られた顔ではなく、東洋的な顔をしていたのではないかというのが私のロマンです。私のような顔がネパール系です。三七、八年前に、今のようにインドの仏教遺跡が公園のようにきれいに整備される以前に、遺跡の調査に行ったことがあります。ナーランダ仏教大学の遺跡に行った時は、まだコブラがいたり、サソリがいたりしました。そういう時代に行きまして、仏教遺跡は田舎にありますから、田舎に行くと英語とかヒンディは通じません。地方の言葉です。インドは現在でもお札に一五種の言語が書かれています。「これは一〇〇ルピーです」という表示が一五種類の言語で書かれているわけです。現代でも言語は多種多様です。インドの田舎に行きますと私はネパール人なんです。「私はどこから来たと思うか」と尋ねると「ネパールだ」と言われました。皆さん方のお顔を見ますと、ネパール系が多いようです。モンゴル系は顎の張った四角い顔です。釈尊はきっとこういう私のような顔をしていたのではないか。そういうことを想像する

と楽しくなる。だからDNA鑑定をしてほしいと思うのです。決して釈尊の遺骨であることを疑っているわけではありません。ガンダーラ地方のパキスタン系の顔をしていないことは間違いない。DNAの鑑定によってそういうことが解るのではないかと、多分、東洋系に近い顔ではないかと、そんなことを思いながら楽しんでいます。

#### ―四門出遊・生苦について―

ある時、釈尊は東の門から出て、年寄りと出会われた。そして自分も歳をとることを知る。南の門から出て病人に出会い、時には病気の苦しみを受けなければならない身であることを知る。西の門から出て死骸に出会って、自分も死体となることを知る。西の門から出て死人に会ったと語られていますが、その場面が日本では仏画などで葬式の行列として描かれていますが、あれは間違いです。死骸が転がっていたのです。これは先ほどもうしましたように、三〇数年前にインドに行った時に、カルカッタで死骸が道端に転がっているのを見ました。それから仏教遺跡が整備されて、どんどん観光客が行くようになってからはそのような死骸を道端で見ることはなくなりました。昔は死骸で商売していました。「この死骸を焼いてあげるお金をください」と。焼く金がないならそのまま川に流せばいいんですが、そういうことを知らなかったので、可哀相だと金をあげてしまいました。インドという国はすごい国です。死骸を商売道具にする。それには感動しました。

ですから、二五〇〇年前のインドにおいても、城外に出たら死骸が転がっていたのです。それ

を見て釈尊はびっくりしたわけです。最後に北の方から出て、先ほど説明した沙門に出会い、その清らかな眼差しに感動して、釈尊は沙門となる決意をする。歳をとり、病を得て、死んでいくという三つの苦しみ「老・病・死」という三苦と、その苦しみからの解放を求めて修行の旅をしている沙門に出会う。そして、沙門の何とも言えぬ清らかな眼差しにショックを受けて釈尊は沙門となって出家するという物語です。

ところが、この物語には重要なことが見落とされているという欠陥があるのです。それは仏教の基本は四苦です。それなのに、ここでは「老・病・死」の三苦しか説かれていない、生苦（生まれることの苦しみ）が欠けているのです。「生・老・病・死」という四苦が、苦の基本です。四つの門しかなかったから省略したというわけでしょうか。釈尊が亡くなった後、仏教では、この生まれることの苦しみ（生苦）が四苦から外され、生まれたから歳をとり、病を得て、死ぬのであるというように、三苦の原因と位置づけられます。したがって、生まれることは苦しみではなく、苦しみの原因とされているわけです。現代でもそうです。生まれること自体は苦ではないが、生まれたことによつて三苦があるという理解となっています。そこで、生苦については、人生苦であるとか、生きることの苦しみとか、という解釈をしたりしますが、それは行き過ぎた解釈なのです。釈尊は生まれることが苦しみ、生苦それ自体を説いているのです。それは輪廻の思想の上にかかえてこないので。生まれるということは輪廻の世界に生まれるということです。生まれることそのことが苦しみです。自らの行いの報を受けて生まれ変わるわけです。この世に奴隷として生まれたのは、過去世においてそれだけの悪いことをしたからであるという、生ま

れ変わることの苦しみ、これが生苦です。私が思うのは、釈尊が城外で見たのは、城内にない現実の情景を見た。それは生まれること自体が苦しみとしかいいようのない人たち、奴隷たちや下層階級の人たち、生まれたこと自体が苦しみである人たちを見たのです。地を這うようにして暗がり生きています。「お前が奴隷として生まれたのは過去世において大罪を犯したからだ」と言つて軽蔑され、足蹴にされ、唾を吐きかけられ、少しでも努力して人並みになろうとすれば生意気だといつて排除される。ぶん殴られる。そういう人たちが一杯いたわけです。この姿に釈尊はショックを受けた。城の中にも奴隷はいますが、城にいる奴隷は身ざれいにしてちゃんとしている。外で見た奴隷は本当に泥まみれになって地を這うようにして、軽蔑され、足蹴にされ、唾を吐きかけられ、惨めに歳をとり、惨めに病気になる、惨めに死んでいく。そういう生々しい悲惨な生・老・病・死の四苦の現実には釈尊はショックを受けたのです。これがインドの他の宗教家たちと釈尊の決定的な違いなのです。

# —命が平等である事—

釈尊はその時に直覚したんです。彼らの命と、一国の皇太子として優雅な生活を送っている自分の命とにどんな違いがあるのか。同じではないか。それなのに人間の都合によつてそこに差別をつくる。これは間違いだと直覚したんです。「生きとし生けるものの命はすべて平等でなければならぬ。人間の都合によつてそこに生まれによる命の差別を作つてはいけません」。これが釈尊の直覚なのです。だから命は平等であるという教えは釈尊の教えの特色なのです、仏教以外に

はないのです。キリスト教でも命の差別を厳然と認めている。ヒンズー教も生まれの差別を認めている。命への差別の眼差しを全く持たないのは仏教だけです。このことは皆さん方にもはっきりと知っておいてもらいたいと思います。宗教といえどどのような宗教でも命は平等と説いていると思っただけです。あらゆる生きとし生けるものの命は、すべて平等であると見る。これは仏教だけです。「一切衆生」とか「一切有情」という、「すべての生きとし生けるもの」、こんなうつくしい言葉があるのは仏教だけです。他の宗教にはこのような感動的な言葉はありません。何ともいいようなない素晴らしい言葉じゃないですか。「すべての生きとし生けるもの」、こんな感動的な言葉は仏教にしかありません。釈尊が入滅された時の涅槃図を見てください。釈尊を取り囲んで涙を流しているのは人間だけではなく、動物もいれば鳥もいる蛇もいる。みんなが泣いている。仏教の最も基本的な「命は平等」という教えが象徴的に示されています。生きとし生けるものの命はすべて平等でなければならない。それを人間の都合によって差別するとは間違いであると、釈尊は直覚したんです。

ところが、直覚ですから理屈がない。ピンときただけですから。それで釈尊は自らの直覚を説明する論理を見いだすのに大変苦心された。その論理が「縁起の道理」といいます。これは釈尊が発見した道理ではないのです。そういう道理を発見したのです。全ての生きとし生けるものは、例外なく、人間の知識では分析できない程の条件によって成り立っている。このような道理をよくも発見されたものだと言われます。すごい道理を釈尊は発見された。釈尊が覺りをひらいた時に、「初夜、昼夜、後夜にわたって縁起の道理をもって繰り返し繰り返し観察した」と説かれ

ていますが、自分の直覚がどこまで普遍性を持っているか、繰り返し、縁起の道理をもって観察したわけです。この縁起の道理によって「命は平等」と確認されたわけです。それはどういうことかと言いますと、いかなる命も無量無数の因縁によってあり得ているのであって、自ら選んだ命ではないということにおいて平等である。一〇〇%頂きものであるということにおいてすべての命のあり方は平等である。そういうことです。

ちなみに、釈尊は六年間の苦行をされ、骨と血管が浮き出る程になるまで痩せ衰えた姿を苦行像と呼んでいます。あれについては、苦行像と見るのは間違いで、あれは覺りをひらいた時の成道の姿である。苦行像であるならば、苦行中の釈尊はまだ成道に到っていないのであるから光背があるのは不自然で、あれは苦行を捨てた直後に覺りをひらいた時の姿であり成道の時の姿である。美術家は苦行像と決めつけているが、そうではなく、苦行を捨てて何か月も経って覺りをひらいたわけではないのですから、苦行を捨ててすぐ後にスジャータの乳粥の布施を受けて、菩提樹の下で覺りをひらかれたのであるから、あれは覺りをひらいた時の姿とみる方が現実性を持っているのではないか。だから覺りをひらいた時の姿であるから光背がある。そういう指摘をしている方がいますが、私も同感で、そうだと思います。

## 縁 起

釈尊が縁起の道理によって「全ての生きとし生けるものの命は平等でなければならない」ということを再確認した。生きとし生けるもののすべての命は無量無数の人間の知識を超えたいろ



ろな条件・因縁によって只今の瞬間が成り立っているという、この釈尊の説法を聞いた大乘の菩薩たちは、次のように感動して受け取っている。「ガンジス河の砂の数を超えるほどの諸仏たちが只今の自分となっている」と。これはすごい頂きです。釈尊は道理として無量無数の因縁が私となっていると説きましたが、それを聞いた大乘の菩薩たちは瞑想の中で、無量無数のガンジス河の砂の数を超えるほどの諸仏たちがたった今の私となっていると聞き取った、これは信心の世界です。

仏たちが私となっている。仏は外にいたのではないんです。仏がこの身になってくださったという感動を持って釈尊の説法を瞑想の中で聞いた。そういうのが「縁起の道理」です。この縁起の道理に基づくならば、私を私たらしめているいろいろな条件を全て取り払ってしまうと「これだけは私であると言える、何か確かなものが残りますか」と、釈尊は弟子に尋ねます。皆さん方は考えたことはありませんか。釈尊は「何も残らない」と言うのです。それを「無我・我なし」と。私を私たらしめている無量無数と言っている程の因縁・条件によって只今のこの瞬間が起こっている。起という字がいいです。起というのは瞬間の生起を表す言葉です。ダイナミックです。単に存在というスタティクな意味ではない。縁起とは、過去の因縁があつて、その結果として現在の私という存在があるというようなスタティクな話ではない。只今のこの瞬間の中に無量無数の因縁を見ていく。だから過去の因縁があつて、只今の私があるという固定的で時間的な因果論は仏教ではない。仏教の因果論は只今のこの瞬間の中にいろいろな縁を自覚していくのである。ご縁があつたということではない。現在のこの瞬間の中に縁が自覚されてくる、

無始より流転する過去が現在のわが身において見えてくる。そして未来が見えてくる。これが釈尊の因果応報という意味なのです。

私は今ここで話をさせてもらっている。もちろん過去のいろんな条件もありますが、この瞬間は皆さん方との間で、今ここで話をさせてもらっているという関係によって成り立っている。この瞬間しか私という存在はありません。そういう瞬間瞬間が六六年間続いてきているわけです。この瞬間は話をさせてもらっている私しかいません。この瞬間は話を聞いて下さっている皆さんがそこにいるから、話をしているという私があり得ている。もし何かの手違いで私の話を聞きに来る方が誰もいなかったら、誰もいないのに私は一人で話をするわけがありません。また、皆さんが居眠りして誰も話を聞いていないような状態になれば私は帰ります。しかし話を真剣に聞いてくださる皆さん方がいるから、ここで話をしているという私の瞬間がある。こんな素晴らしい瞬間がある。南無阿弥陀仏の名号を背にして釈尊の話をします。こんなハッピーな瞬間はない。私の長い人生の中で、辛い瞬間もいっぱいあります。悲しい瞬間も一杯あります。死んでしまおうかと思う瞬間もあります。しかし今日はうれしくて仕方がない。こんなすばらしい瞬間を皆さんがおつくりくださっている。そう思うと、皆さんが光ってくる。この私の瞬間は皆さんによって成り立っている。そう思ったら皆さんが光ってくるのです。それを大乘の菩薩たちは、諸仏たちが私となっていると頂き、そこに光を見たんです。光の世界を見たんです、瞑想の中で自分となっている諸仏たちの姿を光として見たのです。大乘の菩薩たちは信心の光の世界でそれを見たのです。菩薩たちは、楽しい時も悲しい時も、自分に都合のよい時も都合のわるい時も、切ない時も苦

しい時も、すべての時に光を見たのが菩薩です。残念ながら、私は辛い時は光って見えません。暗い思いに沈み込んでしまいます。悲しい時、辛い時は光は見えません。暗い世界に身を置きます。しかし本当は如何なる時も光っているのです。この私でも名号を背にして釈尊の話をさせてもらっているこの瞬間は光って見えます。皆さん方に照らされている瞬間に身を置いて話をさせて頂いています。ですから、伝教大師は「一隅を照らす人となれ」と立派な人になるよう修行をなさいと教えていますが、確かにそれはそれでよいのですが、どうもそうではなく、照らすのではなく照らされている己の身に目覚めよというのが本当のところではないでしょうか。たぶん立派な修行者も、自分が照らしているのではなく、自分が照らされていたことを覚ったのではないのでしょうか。

### 靈魂の考え方・無我の考え方

この縁起の道理に大変な感動を持って釈尊の弟子になった人の代表者としては、舍利弗や目連もそうです。また、大乘仏教の思想的大成者である龍樹もそうです。龍樹は「縁起を説く世尊」こそが正覚者の中の最高の方であると帰依して、バラモンから転向するわけです。

この「縁起」という思想に基づくならば、私を私たらしめている因縁の全てを取り除いたら、私といわれる何者も残らない「無我」ですから、この世に存在している全ての因縁が完全に消滅すれば靈魂などが残るわけではありません。それを釈尊は「涅槃寂靜」と説いています。これは釈尊の往生論です。ところが、日本の民族宗教では靈信仰を説きますから、靈魂が残ると考えて

います。私のこの体が灰となって消えても靈魂だけは残る。タマとなり、やがてカミ(神)となるという靈魂観です。日本仏教はうまくそれを利用している。真宗だけがその靈魂観との関係を断ち切っています。日本の他の仏教は民俗宗教を利用しながら発展してきましたから、どうしても切り捨てられません。親鸞聖人は完全に切り捨てました。靈という言葉を積極的な意味で一言も親鸞聖人は口にしていません。なぜ人間は靈というものを考えるのでしょうか。民俗により、地域により、文化とか民俗性とかで、いろんな靈が考えられてきました。靈についての考え方が様々であるということは、要するに、存在するものではなく、人間が考えだしたものにすぎないからなのです。それでは、なぜ靈の存在を求めるのでしょうか。インド人はなぜ輪廻転生を求めるのでしょうか。それは自己存在に対する強い執着があるからです。この世から自分が消えていくことが是認できないわけです。何かを残したい。インドでは、生まれ変わり死に変わりをするために、その連続を可能にする靈が必要とされます。それは日本の靈魂説とは違いますが、その靈のことを伝統的には「アトマン」と呼んでいます。アトマンはこの世から次の世へと私の行った行為の報いを持つていつてくれる存在です。まあ遺伝子のようなものです。私たちの遺伝子は死んだらなくなる無常なものです、無常でない遺伝子のような存在がアトマンとしてあり、それが次の世への転生を可能にしているわけです。

ところが、アトマンは、人間の五感や六感では認識できない。それをどう認識するかというと、私たちは「私は、私は」と言っている生きているが、「私は正しい、私は間違っていない。私は善である」と、「私は、私は」と言わしめているのがアトマンであるという説明です。ところ

が、釈尊は、「私は、私は」と言っている自己存在に対する強い執着、我執がアートマンを作り出しているだけであると、それを逆手にとって、我執があるから、アートマンを作りだし輪廻に転生することを求めるのであると説きます。「私は、私は」と言って、自己存在に執着している自我が生き残ろうとする、私はそれを、「自我の断末魔の叫び」とか、「自我の生き残り作戦」というのですが、私だけは何とか生き残りたい。自分の命を継続させたい、そういう我執がある。その我執が霊を作り出している。そういうように釈尊は洞察している。だから「無我」という教えを説かれたのはアートマンという霊的な実在、私の存在が露と消えても何かが残るであろうと考えるような我執を否定するのが「無我」の教えです。

「私は無宗教である」と言いながら、そういう人が「死とは何ですか」と聞くと「再生への出発点である」という。生まれ変わるための再出発が死であるという、わけのわからないことを言います。たぶん何に再生するかまでは考えていない。科学的合理主義に立って死後のことは死んでみないと分からないということなのでしょう。しかも、この世に存在する命を生きているという事実があるため、その命を我がものとして何とか未来永劫に残そうとして再生を考えるわけです。その最も強烈なのが輪廻転生説です。インド人は我執が強い、自我が強いと言われますから、そのためでしょうか。釈尊は自分の体に対する執着を離れよと、そのことを力説しています。それは日本人が考えているように、生きている生き方の中に煩惱を見えるというような自己反省的な話ではないのです。自己の体に対する執着を捨てることによって、また生まれ変わりたいという再生への願望が消えていきます。輪廻転生というのは、生き残りたい、自分の命を継続させた

いという自己存在に対する再生への願望が作り出した生命観です。自己存在に対する執着をなくしていけば、輪廻転生などは自然消滅するわけです。そのために釈尊は自己自身の存在に対する執着を捨てよと、我執の強いインド人であるからこそ強調したのです。最も自我の強い、自己存在に対する強い執着を持っているインド世界であるからこそ、それを捨てよと説いたのです。これが釈尊の教えである「無我」です。

無量無数のご縁によって私たちはこの瞬間瞬間の命を賜り、生きているつもりが、生かされているのです。そして命を終えれば、私を私たらしめている全てのご縁が消えていく。仏教では死ということをも「死ぬ」とは言わない。「入滅」と言う。滅に入る。真宗でも同じです。「祖師聖人が死んだ」と言わない。「入滅」、滅に入られたと言う。滅のことを「涅槃」と言う。涅槃という言葉の意味は消滅ということです。「無上涅槃」とは完全な消滅ということです。「大涅槃」も同じです。釈尊が滅に入られたという。それは私の命を命たらしめてくださった命の世界へ消えていった。滅に入った。このことを、たとえば一休禅師は「引き寄せて結べば草の庵にて、解くればもとの野原なりけり」と言います。旅の途中で、一夜の雨露をしのぐために、川原に生えている草を切り取って束ねて、やっと人間が入れるくらいの庵をつくって、そこで一夜を過ごす。そしてまた旅に出ていく。つくられた庵はいつのまにか解けて元の野原に返っていく。私たちの存在はこの庵のようなものであると、一休さんはそう詠んでいます。禅僧らしい達観ですが、ちょっと寂しい。金子大栄先生は温かい。「お浄土は故郷である」と。入滅を故郷と言われると何となく帰ってみたいなと思うでしょう。心温まり何となくいいでしょう。同じことを言ってるので

すが、故郷なら帰ってみたいという気になります。そういうのが浄土の世界です。

ところが、入滅は寂しい。或る方が熱心な真宗門徒になる以前の話ですが、ある時、私の話が終わった後で「先生の話を聞いたら、死んだら無となり終わりか」と言うわけです。それで「そうじゃない。今すでに、あなたは無いんですよ。あなたは自分自身でそこにいるんじゃない。無量無数のご縁によつて「私は、私は」と言つて、偉そうな顔をしているだけなんだよ。ご縁がなかったらあなたはもとも存在していない、無なんだよ。死んで無となるわけではない。今がすでに無なのに、それが見えないから、死んだら終わり、そのようにしか考えられないでいる。聞法を続けなさい」と。私たちの命は全部頂きもの、一〇〇%頂きものです。これだけは私のものだ。残るものがあつたら一〇〇%頂きものとは言えません。しかし残るものは何もない。私というものは何もない、すでに無・ゼロであるのに今生きている。この私のすべては頂きもの、一〇〇%もらいものなのだから、命終えていくときは、娑婆のご縁を一〇〇%返せばいいだけです。簡単な話でしょう。もらうものをもらつておいて、返すのは嫌だというから問題が起こる。それで靈魂として残りたいとか、それが自己存在に対する執着、我執の産物です。もらったものなら返せばいい。それが返しきれないところに、我執による人間の苦悩があるのです。それを罪惡甚重というでしょう。煩惱具足の凡夫というのでしょう。

## 無量の命

『正信偈』の最初に「帰命無量寿如来」とあります。「帰命」と、命に帰りますと。帰命とは

すごい字です。サンスクリットの名語はナマスです。それを「帰命」と訳した漢訳者には敬服します。ナマスというサンスクリット語は最大の敬意を持って尊敬を表わす言葉ですが、このような帰命という、「命に帰る」という意味はありません。最大の敬意を相手に払った時に出てくる言葉ですから最高の言葉ではありませんが、それを「帰命」と訳した。この漢訳者は仏教の真髄を了解している。命に帰る。「私は、私は」と言って生きてきたこの私の命はどこに帰るのか。無量なる命を仏名で表したのが無量寿如来です。無量なる寿(命)としての如来の命に帰る。それが帰命無量寿如来です。命の故郷としての「無量寿」に帰る。これを親鸞聖人は「教行信証」の中で「帰命は本願召喚の勅命なり」と。自らの命に執着して何を迷っているのか。何を残そうとしているのか。ひたすらこの真つすぐな白い道を進んできなさい。わき目をふらずに、火の海、水の海を恐れずに、白道を真つ直ぐに突き進んできなさいという、そういう本願の命令が帰命ということであると、親鸞聖人は「帰命は本願召還の勅命なり」と頂いているわけです。

私たちが頂いている本願とは、命の世界、無量寿なる命の故郷へと真つ直ぐに進んできなさいという願いです。その本願に目覚めた私たちの方からは帰命無量寿如来という帰命となります。娑婆の縁が尽きて、命を終えて帰る浄土とは、入滅の世界、無量なる命としての如来の命に私の命が帰っていくことです。これを親鸞聖人は「浄土三経往生文類」で明確に説明しています。「無量寿経」、「観無量寿経」、「阿弥陀経」の三部経の中に説かれている往生を特徴的に示している論文ですが、極めて明快な論旨です。その中の最初にある「無量寿経」に説かれている「大経往生」の説明において、四十八願が説かれているが、それは阿弥陀如来によって選択されたもの



である。その本願は人間の考えを超えた無量無数の誓願の海の中から選択されたものである。その本願は私たちの計らいによる誓願ではないのであり、他力にはかならない。本願は他力である。仏からの本願であり、私たちの努力によって得られる本願ではない。阿弥陀如来の国に往生したいと願うならばそれを実現させようという念仏往生の本願(第十八願)が原因となって、必至滅度という本願が実現される。滅度とは完全な消滅という意味ですから、必ず完全な消滅に至らしめるといふ本願(第十一願)が結果として得られる。必至滅度とは入滅のことです。「念仏往生の願因によりて、必至滅土の願果をうるなり」と。こういう命のあり方が明らかになったということが、只今この瞬間において必ず仏となる身に定まった者として、必ず真実が報われた世界へと至る、「現生に正定聚のくらいに住して、かならず真実報土にいたる」と。そして、これこそが「阿弥陀如来の往相回向の真因なるがゆえ、無上涅槃のさとりをひらく」と。

私たちはこれまで述べてきたような命のあり方において、この瞬間を生きていると教えてくれているのが仏教です。そういう今の、この瞬間が明らかになった時に、何の心配もいらない。必ず私たちは仏となる身となる。必ず真実が報われた世界に往生する。必ず真実報土に至るのが「大経往生」ということです。それが私たちの迷いから悟りへと向かう往相として阿弥陀如来から回向された第十一願の真因です。このことが『無量寿経』に説かれているわけです。

しかし私たちは「そうでありましたか、よくわかりました」とはなかなか頭が下がらない。阿弥陀如来の本願を信じきれず、この世で精進して善業を積んで少しでも安楽な来世に往生したいと、自力の計らいを捨てきれず、賢善精進をして少しでも幸せな来世に生まれ変わりたいと願う。

これを方便化土への往生と言う。真実報土を実現するための方便としての化現の世界です。しかし親鸞聖人はこの方便化土への往生を真実報土ではないと一方向的に否定せずに、そういう人間の側のいかんともしたい分別を無視せず、『教行信証』の最後に「化身土」の巻において、そのことを詳しく説明しています。「大経往生」を説くだけならば「化身土」の巻は不要です。しかし、人間は愚かなものです。入滅もなかなか受入れられない。死後に理想の世界を求める。よくあることじゃないですか。死んだら親に会いたいというが、そのときの親は着物を着ているのか。はそういうことがある。死んだら親に会いたいというが、そのときの親は着物を着ているのか。洋服ですか。帽子を被っているのですかなどと理屈をいわないで、それでもよいじゃないかという情の世界があります。親鸞聖人はそういう人間の愚かさを切り捨てないで、人間の側の計らいや分別によって様々に幻想される死後をもそのまま受け入れて、結局のところ、本願によってみんな同じところに還らせてもらう、共に同じ命の故郷に還らせてもらう。死後に幻想を抱いて、美しい世界をイメージしても、例外なく必ず滅度（完全な消滅）に至ります。必ず入滅します。それなのに人間の計らいで、死後に理想の世界を求めたり、転生を願ったりしますが、しかし必至滅度の願が成就して、一人の例外もなく真実が報われた世界に往生せしめられていくという摂取不捨という事実、親鸞聖人においてはそのことが自明の事柄としてあったわけです。

今日はこれくらいで終わりたいと思います。最後までご静聴いただき有り難うございました。

質問 大学の名誉教授であった方が、八一歳でお亡くなりになりました。英語の先生で立派な方

でしたが、亡くなられる前に、死んだら無だということをおっしゃっていました。私もそうかなと思っていました。今日の話でもそのように伺いました。無ですと。

小川 死んだら無になると、お話したつもりはありません。そうではなくて、今が、すでにこの「私」は無なのです。死んでから無になるのではない。死ねば肉体は消えて存在しなくなるけれども、ただ今、生きているこの瞬間が全て頂きものだからいただきものが無くなっただけの話です。私が無くなったわけではありません。しかし、私はここに存在しているという執着はなかなか捨てられませんから、やはり「死んだら無」と考えてしまうのでしょうか。

質問 一切何もないわけでしょう。亡くなりましたらお寺さんで戒名をいただきます。

小川 戒名ではなく法名です。

質問 無になったものがなぜ法名がいるのですか？

小川 法名は生きているあいだに必要なんです。お釈迦様のお弟子になった名前なので、死んでからの名前ではないんです。他宗では仏壇の中に位牌がありますが、真宗には位牌はありません。それは仏教以外の靈魂信仰が仏教の中に馴染んで、位牌というものになっています。しかし、靈信仰を認めない真宗の内仏（仏壇）には位牌はありません。

質問 真宗でもお位牌は仏壇の中にありますね。

小川 それは間違っています。亡くなった方の法名は軸に書いてあります。亡くなった方が仏弟子となられた法名を書いてあります。しかし、その法名にお参りをするわけではありません。位牌にお参りをするのではなく、ご本尊にお参りするのです。

質問 仏壇の中に真宗でもお位牌があるんですよ。

小川 お住職に相談して聞いてください。「位牌はあっていいんですか」と。住職は「本尊だけがあればよいのであって、位牌は必要ない」と言われると思います。もし「位牌はあっていい」という住職がいたら、それは真宗の住職ではない。

質問 すべて平等であることは仏教の教えだけだと伺いました。キリスト教とか他の宗教はどのように違うのですか？

小川 キリスト教は人間と動物の命は完全に区別しています。人間同士の命についても、キリスト教徒であるかどうかによって差別しました。異教徒を神の名において殺してきた歴史があります。現在は違うかもしれませんが。アバルトヘイトとか人種による人間差別もしてきました。そういう歴史を持っているのがキリスト教です。それはいけないことであると、最近では反省されていますが、歴史を見た場合には、命を差別してきた歴史を持っています。ヒンズー教徒は今でも「低い階層に生まれた人は過去において悪いことをしてきたからそうなっていると、この世にいいことをすればもつと幸せになれる」という生まれの差別を拭いきれないでいます。世界にあるすべての宗教を調べたわけではありませんから、断言はできませんが、世界宗教と言われているものの中で、「命は平等」と説くのは仏教だけです。人間だけでなく魚も命があった、牛も命があった。それを人間が生きたために殺して食べる。だから「いただきます」と言う。こういうことは仏教以外にはない。全ての命に対して合掌する、こういう教えがあるのは仏教だけです。

質問 釈尊の「真宗」とありますが、直観としてすべての命は等しいと。釈尊の悟りの内容と真

宗の本願の世界、阿弥陀仏の世界の二つが同じものと思いたいし、そう思うのですが、論換づけ、しっくりこない、結びつかないのです。

小川 本願はなぜ起こったのか。釈尊の命の原点に目覚めてほしいという願いが本願の浄土思想です。私たち一人ひとりが釈尊によって明らかにされた命の真実に目覚めてほしいと私たちにそのことを促しているのが本願です。簡単に申し上げますと、そういう関係です。親鸞聖人は本願を通して釈尊の命の教えに触れたわけです。そこに本願が介在する。本願についての直接的な説明は今日ではできませんでしたが、簡単に言うと、そういう関係にあります。

質問 最近、痛ましいことが起こっていますが、そのことについて釈尊、親鸞聖人はどのようにとらえるか。釈尊の教えからどのようにとらえたらいいか。

小川 それは難しいですが、無責任な言い方のように聞こえるかもしれませんが、それぞれの縁の中でいろいろな事件が起きているのだと思います。『観無量寿経』に「王舎城の悲劇」が説かれています。頻婆娑羅というマガダ国の国王である父親を息子の阿闍世が殺害する。『涅槃経』にもその事件が詳しく説かれています。彼は親を殺したことによって大変な苦悩をする。

苦悩の余りに熱を出して化膿してかさぶたとなって、それが悪臭を放つ。それほどの苦悩をする。その時にいろんな先生が現れて「あなたは父親を殺しても苦悩する必要はない。いい国をつくろうとして国のために殺したのだから悪いことではない。あなたのように父親を殺して王様となって立派な国をつくった人もいます。苦悩することはない」と説得をする。説得されても阿闍世の苦悩は治らない。どんなに説得されても体の熱が引かない。最後に釈尊の説法を聞いて懺悔の涙を

流す。「もしあなたのお父さんが国王でなかったら殺したでしょうか。もしあなたが王子でなかったら父王を殺したでしょうか。」と、釈尊は説きます。父親が王であるために王子の阿闍世は殺すわけです。ご縁です。ご縁によって父親を殺すという、人間としてあつてはならない大罪を犯してしまった。そういう説明をする。その時に阿闍世は「お釈迦様の教えをもう少し早く聞いていたなら父親を殺さずにすんだかもしれない」といつて懺悔の涙を流す。そして「ご縁のままに時には親を殺してしまう、そういうご縁によって大罪を犯してしまった人たちの苦しみを私のもとともに共有していきたい。ご縁のままに罪を犯し、苦悩している人々とともに私はこれから地獄で生きていく。決して罪は消えない」と。そういうストーリーで阿闍世の救いが説かれます。

私たちの周りでは目を覆うような事件が起こります。いろんな環境があり、成長の段階があつて人を殺しても何とも思わないような生き方をしなければならない縁の中で生きていくしかない。そういう縁をつくりあげていくところに私たちの大事な問題がある。実は昨日、大谷大学で開学記念式典がありまして、京都大学の長尾真総長にお願いして講演をして頂きました。「今の社会、経済的な繁栄のみを追及する人間の社会、競争社会をつくって人間がいがみ合っている。そういう社会をつくりあげているからいろんな問題が起こる。そのためには生きとし生ける命がともに生きあつて、ともに相手の命を尊重しあう仏教などの教えが、これから欧米の競争社会を打ち破って人類の教えとならないといけない」と長尾総長が言われました。この方は工学博士です。仏教とか宗教とかとは全く分野の違う方ですが、そういうことをお話になりました。いま起こっ

ている現象をどう思うか。この痛ましい現象を私たちがつくり出している。私たちの責任です。そのことを尋ねていった時、「時間はかかるかもしれないが、もう少し互いを許しあえる、認めあえる世界が開けてくる。開けてきてほしい」と長尾先生も言っておられます。私たちはご縁によつて、いいこともし、悪いこともして、時には涙を流して生きています。親鸞聖人が言われるように、「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」(歎異抄二三)と。